

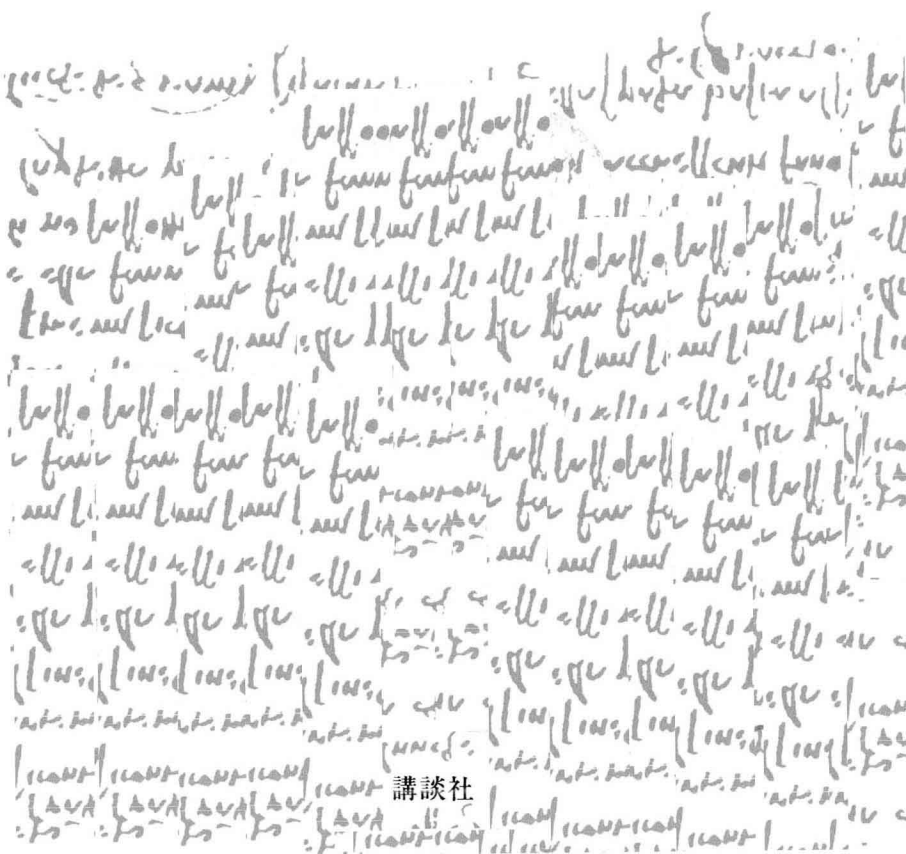
ガン回廊の炎

柳田邦男



ガン回廊の炎

柳田邦男



柳田邦男（やなぎだくにお）

1936年栃木県生まれ。1960年東京大学経済学部卒業。NHK記者を経て現在ノンフィクションの著作に専念。1972年『マッハの恐怖』で第3回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。著書に『航空事故』『空白の天気図』『零式戦闘機』『失速』『新幹線事故』『大いなる決断』『事故の視角』『狼がやってきた日』『ガン回廊の朝』（第1回講談社ノンフィクション賞受賞）『マリコ』『日本の逆転した日』『発想の現場』『事実からの発想』『日本は燃えているか』『事実の読み方』『零戦燃ゆ』『フェイズ3の眼 正・続・新』『撃墜(上)(下)』（ボーン上田国際記者賞受賞）『死角 巨大事故の現場』『ブラック・ボックス』『「死の医学」への序章』『活力の構造 戦略篇・開発篇』などがある。

ガン回廊の炎

定価一六〇〇円（本体一五五三円）

一九八九年七月二十八日 第1刷発行

著者 柳田邦男

装幀 山岸義明

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二二—二

郵便番号 一一二—〇一

電話 東京(03)九四五—一一一一（大代表）

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© 柳田邦男 一九八九年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは学芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

ガン回廊の炎／目次

第一部

病院長・市川平三郎は読影台に掛けられたX線写真を見て、「これは早期胃ガンですね」といって、さらに氏名欄をのぞいた。そこにはまぎれもなく自分の名前が――

レリーフ

11

歳月

19

「美談だよ、君」

28

戦列復帰

35

外科医

43

探触子

52

創世記

59

無銭の船旅

71

周辺技術

75

腫瘍栓

81

手術の精度

89

背水の陣

97

開発夢想

107

七人の侍

114

確かな歩み

120

青い光

128

第二部

—— その患者は昨日食道ガンの大手術を受けたばかりなのに、もう新聞を読んでいた。麻酔科医・平賀一陽は硬膜外モルヒネの威力に驚き、「みんな見てこいよ」といった。

死の社会化

141

モルヒネ革命

146

劇的効果

152

輸液革命

160

無菌室

168

機能温存

176

還暦の情熱

184

先駆

192

潜血反応

197

寒天の塊

206

基礎と臨床

213

日本のアプローチ

217

もう一つの挑戦

224

腫瘍消失

227

生命の質

231

組織のなかで

237

蘇生術論争

247

看護日誌

255

浜辺の歌

263

第三部

——一九八二年夏、TNFという物質が「夢の制ガン剤」として誇大に報道された。「三十二歳の妻のためにTNFを」。末期患者の夫の行動が政治を動かした——

寒風の訴え

275

国家戦略

281

重点課題

288

ガン遺伝子

293

十二カ条

302

旗振り役

306

夢声会

311

3 A 病棟

316

前壁病変

324

使い分け研究

330

電子の眼

333

開発競争

340

○・一ミリの攻防

346

微小ガン診断

351

「あれは何だ」

357

兵糧攻め療法

362

「愛、寛容にして」

367

必要条件

378

五セント硬貨

385

研究開国

389

比較文化論

395

外国人の刺激

402

ハワイの海藻

407

プロモーター

414

日本の長短

418

実験室の演歌

424

第四部

—— 外科医・土屋了介は高齢者の肺ガンでも切れるはずだと、徹底的に研究をして、八十歳のタエの手術に臨んだ。二週間後、タエはスタスタと歩いて帰るではないか。

三人の女性

431

心の危機を超えて

438

『闘争宣言』

444

縮小手術

450

再建か保存か

457

「さよなら」の握手

465

帰宅

473

底辺の支え

479

患者の内実

486

母親の訴え

492

温かい味噌汁

501

可能性の追求

508

適応の条件

519

限界への挑戦

526

拡大手術

531

集学

539

“少数者”のために

545

一瞬一瞬を掬って

550

転換期

561

四つの花束

573

あとがき

582

取材協力および資料提供者

591

主な引用・参考文献

592

装幀
山岸義明

第一部

マイクロエレクトロニクスや材料技術を軸に進展する技術革新の波は、一九八〇年代のガン医学を飛躍させた。肝ガンの病巣や血管の状態を画像で手に取るようにわかるようにした術中超音波探触子の開発は、難しかった肝ガン手術を出血のない確実なものにし、日本の独創的X線診断装置C Rの登場は、X線診断学にセンセーションを巻き起こした。

レリーフ

京の嵯峨野は、十一月も下旬になると、辺りが枯葉色に染まってくる。
その一角に、臨済宗天龍寺がある。

一九七九年（昭和五十四年）のことだった。

学識が博く、人間的にも「おもしろい人」として知られる天龍寺の関牧翁せきぼくおう管長の法話を親しく聞くと、月に一度ずつ集まる関西人のプライベートな小グループ「龍門会」の例会が、この月は二十四日土曜日の夕刻に開かれることになっていた。

早目に着いた人々は、晩秋の午後の穏やかな日射しをあびた庭園を回廊から眺めて、時を過ごしていた。この会に一人だけ東京から参加している国立がんセンター病院長の市川平三郎いちかわへいざぶろうも、早目に着いた一人だった。

禅寺ならではの質素な雰囲気があり、それでいて隅々すみずみにまで設計者の意図の行き届いた庭園には、池と石が心の字に似せて配されている。市川は、この庭を眺めるたびに、日常の繁忙をすっかり忘れるほど心を洗われる思いがした。

市川が関管長と面識を得たのは、自らが中心メンバーの一人になっている胃の集団検診の学会に、

関管長を特別講演者として招いたのがきっかけだった。学会の医師たちから、われわれも時には宗教家の話を聞いて心を豊かにしようではないかという意見が出て、特別講演の企画が立てられたのだった。慶応大学医学部を中退して仏門に入ったという関管長のユニークな経歴にも、興味を引くものがあった。

もともと市川はいろいろな職業の人々の話を聞くのが好きだったが、ガンという難しい病気の患者と日々接しているだけに、仏教における生と死についての関管長の話には、ことのほか心を動かされた。そして、講演のあと、会話を交わすうちに、龍門会のことを知り、「そういう会があるのでしたら、ぜひ私も参加させてください」と願ひ出たのだった。それからというもの、龍門会の集まりがあると聞くと、日程の都合がつく限り京都に足を運んでいた。

十一月二十四日の龍門会は、勤労感謝の日と日曜日にはさまれた土曜日の集まりだったから、都合よく休暇をとることができた。

龍門会の人々は、夕刻になると、本堂に正座して、僧侶たちの唱える般若心経に耳を傾けて心を整えた後、関管長の法話を聞いた。法話がすむと、別棟の管長室に招かれ、精進料理しょうじんの夕食を共にした。

話はずむうちに、会員の一人で大阪の梅田で胃腸科専門の桜橋武田診療所を開いている女医の武田恭子たきようこが、市川に声をかけた。

「市川先生はX線二重造影法による診断学を普及させ、胃ガンの早期発見、早期治療を力説してこられましたか、ご本人は、胃の定期検診を受けていらっしゃるのですか」

市川は龍門会に参加する以前から、武田をよく知っていた。武田は、胃ガンの早期発見、早期治療を目指す大阪胃研究会に早くから加わって勉強してきた熱心な内科医であり、放射線診断医だった。

この研究会に何度も講師としてやってきたことのある市川にとって、武田はX線二重造影法による胃の写真の撮り方や読影の仕方を指導したことのある、いわば「教え子」だったのである。

「もちろん年に一度は、がんセンターで検査を受けてますよ」

市川は、《紺屋の白袴しろばかまではありませんよ》という意味をこめて、笑って答えた。

「安心しましたわ。がんセンターで撮っておられるのでしたら、それで十分でしょうけれど、でも、一度私の検査のモデルになって、写真の撮り方をじきじきに手ほどきしてくださいませんか」

医師に対し、胃のX線写真の撮り方や読影法の指導をしたことは数え切れないほどあるが、検査のモデルになってほしいと頼まれたのははじめてだったから、市川は驚いた。

「この四月に検査を受けたばかりなんですよ。もちろん異常なしでした」

「そこを何とか……」

同席の人たちが、どっと笑った。それでも武田は引っこまずにつづけた。

「もし、明日お時間とれるようでしたら、ちょっとだけでも私の診療所にお寄りいただけませんか」
「しょうか。仲間のお医者さんたちにも集まっていたきますから」

市川は武田の熱心さに負けて、

「うーん、では明日の午前、先生の診療所に寄らせていただきます」

と答えた。

この日は大阪に泊り、翌日の日曜日は、久々にのんびりと過ごして、夕方から大阪・梅田の基会所で親しい医師と碁を打つことにしていたので、武田の診療所でX線写真の読影会をするくらい時間は、十分にとることができると思ったのである。

翌日、市川は朝食をとらずに、午前九時前にホテルを出て、武田の診療所に向かった。

診療所は梅田のオフィス街のビルの一階にあった。休日なので、ビルはひっそりとしていたが、診療所には、武田やレントゲン技師をはじめ、声をかけられた大阪の医師たち十数人が集まっていた。「きょうは市川先生に、最近私たちが撮った写真を見てほしいのですが、その前にまず先生のX線写真を撮らせてください」

武田にそういわれて、市川は妙な心境になりつつも、早速レントゲン透視室に入り裸になると、透視用の薄いガウンを着て、透視台に登った。

それからコップ一杯のバリウムを一気に飲み、つづいて発泡剤を飲んで、透視台に横になった。武田は市川と一緒に透視室に入っていた。

X線二重造影法は、胃をガスでふくらませ、バリウムを満遍なく胃壁に付着させてから、写真を撮る。そうすると、胃の内壁に薄くついたバリウムが胃の皺や襞を鮮明に白く浮かび上がらせることができる。「二重」とは、白く写るバリウムの部分と黒く写るガス（または空気）の部分とのコントラストを活かすという意味である。

いまでは全国的に普及した二重造影法だが、この撮影法の重要なポイントは、いかに上手にバリウムを粘膜壁に付着させるかにある。薄く、しかも満遍なく付着させることによって、はじめて微細な異常をとらえることができるからである。そのためには、独特のコツが要る。バリウムと発泡剤を飲ませれば、誰にでも「いい写真」が撮れるというわけにはいかない。

武田が市川からじきじきに教えてほしいと思ったのは、そのコツについてだった。

「バリウムを胃壁にびたつとつけるには、船員が甲板を掃除するときに、バケツの水を勢いよく甲板にぶちまける、あの投げつけるような感じで、バリウムを胃壁にたたきつけるって、先生、よくおっしゃいますでしょう」